

西洋参、参叶、土人参が記載されており、来歴、分布、品種、加工調製、薬理、薬効、類似品、偽品などについて述べている。本書の特徴は、本草文献および市場調査に基づく正条品、類似品、偽品の整理および考察にある。著者は中薬研究分野における重鎮で、特に本草関係では第一人者であり、まさに著者ならではの大作といえよう。

1964年に上冊の第一版が出版され、1984年中冊が出版されたが、諸般の状況の変化やその後研究の進展に伴い、下冊より先に上冊の改定が必要であるとのことから、本書を先に執筆され、ようやく出版にこぎつけたとのことである。第一版と比較すると項目数は100から60に減少しているが、書籍サイズはA5からB5へとひとまわり大きくなり、また頁数も増えており、各項目はかなり充実した内容となっている。

本書のように個々の生薬を基原的立場から詳細に論じた本はほとんど見当たらず、中国の生薬を研究する上で貴重な文献である。生薬に携わる教育者、研究者、業界関係者にとっては是非とも揃えておきたい一冊である。

(㈱ツムラ、生物・化学研究所、布目慎勇)

□Lindstrom S. C. and Gabrielson P. W. (ed.) : *Thirteenth International Seaweed Symposium. Developement in hydrobiology* 58. i - xxxviii + 678pp. 1990. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht. ¥54,000. 1989年8月にカナダ・ヴァンクーバーで開かれた第13回国際海藻会議の講演集で、招待講演、ミニシンポジウム、一般講演とポスターの3部から成る。第1部の招待講演では「国際海藻会議の過去と現在」と題してブリティッシュコロンビア大学のR. F. Scagel教授が1952年の第1回より現在に至るまでの経緯をエピソードを交えて述べ、続いてアメリカのマリンコロイドの専門家D. W. Renn博士が「海藻とマリンバイオテクノロジー」と題して海藻の多糖を中心とする生物工学的手法について述べている。第2部のミニシンポジウムでは、1)海藻群集と収穫の関係(5編)、2)海藻の形状と生産力の関係(4編)、3)北米における海藻養殖の進展(3編)、4)有用海藻の分類学(4編)、5)海藻の

プロトプラストの培養と組織培養及びその海藻産業への利用(4編)の5つのトピックスに計20編の論文が掲載される。第3部の一般講演とポスターは、1)分類(3編)、2)生態(14編)、3)資源(9編)、4)養殖・組織培養・育種(17編)、5)生理(7編)、6)海藻の化学組成(15編)、7)海藻の化学物質の構造、8)分子生物学(1編)の8項目から成り、74編が掲載される。国際海藻会議は海藻の利用の研究を進展させる目的で1952年に第1回会議がスコットランドで開かれて以来3年毎の開催で、今回第13回を迎えた。1982年に純理学的な国際藻類学会議が発足したことによって、この海藻会議は最近特におう応用的色彩の濃い研究会議となっている。

(千原光雄)

□内藤 喬 : *鹿児島民俗植物記(復刻版)* 389pp. 1991. 青潮社(〒862 熊本市大江5丁目11-5) ¥18,000(税込)。本書の資料は元鹿児島大学教授の内藤 喬氏が30年間にわたって集めたもので、質、量ともに類を見ない貴重なものである。本書の内容は鹿児島県が中心であるが、沖縄県、四国、本州(近畿、中国)、福井県にも亘っている。本書の初版は昭和39年であるが、出版後直に売り切れ、多くの人から再版が望まれていたが、今回復刻版が出たことは喜びにたえない。(初島佳彦)

□曲澤洲(主編) : *北京果树志* 721 pp. 北京出版社、北京。35元。文字通り北京で栽培される果樹を網羅し、それを解説したものである。夏の日差しが強く、かつ乾燥する(6-8月の降水量は一部を除き500mm以下である)北京は果樹栽培に適しており、温帯性果樹が多数栽培される。本書は巻頭に25ページにわたり約150栽培品種の原色図が載せられている。各種について栽培品種レベルまで線画を付して詳述しており、革命後にソ連やその他諸外国から導入されたおびただしい栽培品種、中国で改良された栽培品種、リンゴの富士のようなこの地における将来性など、園芸学・植物学に加え、園芸史・農業経済の面からも興味深い内容が盛られているように思われる。残念に思うのは配列が植物分類体系とは合致していないことで、外国人には参照に多少の困難を伴うことである。

(大場秀章)